

崩れゆく世界の中で—シェイクスピア『ヘンリー六世』三部作—（下）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-06-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Nishimura, Satoshi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00054291

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



崩れゆく世界の中で

―シェイクスピア『ヘンリー六世』三部作―(下)

高田 茂樹

第三章 『ヘンリー六世・第二部』

『第一部』論の前置きでも述べたように、『ヘンリー六世』三部作は、『第一部』、『第三部』が先に書かれ、その後で、時間を遡るかたちで『第一部』が書かれたと考えられている。現在の『第二部』は、一五九四年に『ヨークとランカスター両家の抗争・第一部』(*The First Part of the Contention between the Houses of York and Lancaster*)という題名で、そして、『第三部』は、一五九五年に『ヨーク公リチャードの真実の悲劇』(*The True Tragedy of Richard Duke of York*)という題で出版されているが、ともに版本の状態も悪く、作者の同意を得ることなく、演じた役者の記憶に基づいて用意されたものではないかと推定されている。作者の名前の記載もなく、一六二三年に『第一・二つ折り版』が出版されて、その中に三部作を通して収められるまで、二つをシェイクスピアと結びつける十分な根拠は存在しなかつ

たというの、先に見たとおりである。

どこか習作といった印象もあり、まだ駆け出しのシェイクスピアがトマス・ナッシュなどの共作で仕上げたものではないかと思われているが、これも確かな根拠があるわけではなく、誰がどの部分を書いたかといった議論については完全に推測の域にとどまっている。

このような事情もあって、作品を論じるに際しては、そういった創作にまつわる経緯についてはひとまず脇に置いて、『第二部』、『第三部』とも、それぞれ完成された芝居をそのまま全体的に論じることにしたい(一)。

創作順についても、先に述べたように、『第二部』、『第三部』が先に書かれ、その後で『第一部』が書かれたと考えられており、このことは、例えば、『第一部』の結末で、フランス軍に見捨てられたジョン・ラ・プツセル(ジャンヌ・ダルク)が、イングランドを激しく呪いながら、火刑に処されてゆくとき 自暴自棄の悪態としか

聞こえないその呪いが、『第二部』・『第三部』を通してことごとく実現されてゆくことを、観客の多くがすでに知っていたと考えられるように、劇の受容の仕方に微妙な変容をもたらすことは十分考えられるが、そういう細部に過度にこだわると、かえって議論を錯綜させて、本筋を見えにくくすることにもなりかねないので、ここではひとまず、内容上の推移に従って、『第一部』に続くものとして、『第二部』、『第三部』を探っていききたい。

『ヘンリー六世・第一部』の中で、私たちは、イングランド国内の貴族たちの怠慢がフランスに遠征していたトールボット父子の死を招く様子を追って、この出来事には、明確に意図したものではないにしても、方向性としては、階層化された社会で人が王と国とに対して果たすべき務めを規定した、伝統的な社会理念を否認し否定しようという意味合いが込められているということを見た。

『第二部』では、こういった社会秩序に対する挑戦は、『第一部』においてよりもはるかに露骨で激しいものとなり、それはまず、護国卿グロスター公ハンフリーの失脚と殺害というかたちで表されることになる。

『第一部』におけるグロスターは、不倶戴天の敵であるウインチエスター司教（後に枢機卿）ポーフォートとことあるごとに対立するなど、その振る舞いはほかの貴族たちの攻撃的な言動とそれほど違っているように見えなかった。尤も、悪意に満ちた独白を頻繁に口にして、王から要請されても、なかなかグロスターと和解しよ

うとしない（三幕一場）ポーフォートなどと比べれば、グロスターに関する描写の方がはるかに穏当なものだったということも押さえておかなければなるまい。

『第二部』でも、グロスターは相変わらずポーフォートと敵対したままであるが、ここでは、彼は、『第一部』においてよりも、護国卿というその公の役割に重点を置かれた造形されており、民衆に対してもほかの貴族たちよりずっと思いやりのある為政者として描かれている。不名誉で国益にも反するヘンリー六世とマーガレットの結婚に対する彼の怒りは、ポーフォートがそう曲解したがるように、個人的な思惑から来ているのではなく、靡れつつある英雄的な武功の時代の数少ない生き残りとしての自然な反応である。その意味で、グロスターは、『第一部』のトールボットなどより人間的にずっと個別化されてはいるが、理想化された共同体の体現者という象徴的な役割をそのトールボットといくぶん共有している。王の結婚の条件への不満を吐露する中で、彼は栄光に満ちたかつての日々を、熱を込めて思い起こす。

国家の支柱であるイングランドの勇敢な諸卿よ、

君たちに、ハンフリー公爵は、自身の憤懣を、それはまた、

君たちの憤懣であり、国全体の共通の憤懣でもあるが、その思い

を語らずにはおれない。

何ということだ、私の兄ヘンリーは、戦いに、

その青春と勇氣と金と民を注いで、

冬の寒気の中と、身を焦がすような夏の暑さの中で、幾度となく野営してまで、

自身の正当な遺産であるフランスの地の征服に努め、

そして、私の兄ベッドフォードは、ヘンリーが獲得したものを政策によって守るために知恵を絞ったものではなかったか。

あなた方自身、サマセットも、バッキンガムも、

勇敢なヨークも、ソールズベリも、勲功めざましいウオリックも、フランスとノーマンディで深手を負ったのでなかったか。

叔父のボーフォートと私自身、

国の議会の該博な面々と、

長きに亘って策を練って、朝から晩まで

議会に詰めて、どうすればフランスとフランス人を

恐れさせておけるのか、あれこれ議論を重ねたのではなかったか。

そして、陛下ご自身も、幼少の身にあつて、

周囲の敵をもとせせずに、パリで戴冠されたのではなかったか。

(二幕一場七五九四行)

ここで印象深いのは、思い起こされている過去の英雄的な事象だけではなく、同時に、そしておそらく劇場ではより強烈な形で、現に今それを思い起こしているグロスターの英雄的な姿である。英雄的で高潔なグロスターというこのイメージは、劇の前半を通して繰り返し想起され言及されることになる。彼のことを憎んでやまないボーフォードですら、「民衆がやつつことを」「ハンフリー、善良なグロ

スター公』と呼んで慕っている」(二幕一場一五八―一五九行)と認めざるを得ず、この言葉は、その後、嘆願に訪れた民衆の一人によってそのまま裏づけられることになる(一幕三場一―五行)。ソールズベリも『私はグロスター公ハンフリーが／高潔な紳士として振る舞わなかったことなど一度として見たことがない』と断言する(一幕一場一八三―一八四行)。のちに、野心に目の眩んだ妻をたしなめて、グロスターは「私が、君主にして甥である／徳高いヘンリーに対してよからぬ思いを抱くようなことがあれば、その瞬間が／このはかない世界における私のいまわの際となるように」(一幕二場一九―二一行)と誓ってみせる。誰をフランスの摂政にすべきか決める場面(一幕三場)で、彼は最初ヨークを推すが、彼の忠義に疑いが向けられると、それに先立つ言い争いを通して、サマセットとの間に反目があるのは明らかであるにもかかわらず、グロスターは私心を抑えてサマセットをその職に推挙する。そしてまた、彼の名がこれを誹謗しようとする者らによってひどい中傷にさらされると、温厚な王は、実際の効果のほどは別としても、ふだんの態度からは考えられないほど懸命にグロスターを擁護し、篤実で高潔なグロスターという観客の見方を裏書きする。

私の正直な思いを言うなら、

余の身内のグロスターは、王たる余の身に

叛逆を企てるなど、乳を吸う子羊か、

罪のないキジバトのように、無縁な存在だ。

公爵は高潔にして温厚で、その善良な性格からして、悪事を思い描いたり、余の破滅を画策したりするなど、あり得ない話だ。

(三幕一場六八―七三行)

けれども、その善良さと王と国を気遣う深い思いにもかかわらず、あるいはむしろ、そういった善良さと思いのゆえに、グロスターは野望に取り憑かれた貴族たちによる殺戮の最初の標的となる。『第一部』におけるトールボットの勇壮な言葉が同輩や郎党、さらには息子から熱い歓呼・応答で迎えられたのに対して、イングランドのかつての栄光に思いを寄せるグロスターの真摯な言葉は、ボーフォートの冷やかな薄笑いにさらされる(テクストのレヴェルだけで見ると、枢機卿の言葉はそれほど侮辱的とも思えず、これに対するグロスターの憤激はいくぶん短気にすぎないようにも感じられるが、表情や仕草、声の調子といった他の要素が加わる劇場での印象は、おそらくかなり異なっているだろう)。

ボーフォートやバッキンガム、サマセットらから見て、グロスターを有罪とする理由は、彼が護国卿であるということそのものである。枢機卿は、グロスターのことを「君たち皆の敵であり、王にとつても……望ましい友などではない」と言う。彼はその明確な論拠を、グロスターが血統の上で王に一番近く、筆頭の王位継承権者であるということ以外、具体的に何一つ挙げるができないが、彼らからすれば、それだけでグロスターを排除する根拠としては十分

なのである。ボーフォートがグロスター失脚のための計略を仕掛けるために出掛けるのを見送って、サマセットとバッキンガムが交わす言葉は、いかにも示唆に富んでいる。

サマセット バッキンガム、ハンフリーの思い上がり

その地位の強大さは、我々にとつては憤懣の種だが、傲慢な枢機卿にも目を光らせよう。

あの男の奢った態度は、国中の君侯の

すべてを寄せたよりも耐えがたいものだ。

グロスターが地位を追われれば、やつが護国卿になるだろう。

バッキンガム ハンフリー公爵や枢機卿がどうあろうとも、

サマセット、君か俺か、いずれかが護国卿になるのだ。

(二幕一場一七一―七八行)

彼らの結束はただグロスターの失脚のための一時的なものでしかなく、その後には、次の犠牲者に狙いを定めた新たな党派の再編がされなければならない。さらにその後には、彼ら自身のあいだの新たな戦いが待っているのである。

そして、フランス国内のイングランドの領土が失われたことを怒るグロスターの憤懣に和する者たちの間でも、それぞれの背後にある動機は、国の行く末を気遣うグロスターの一途な思いとは異なっているか、あるいは、時と共に異なっていくことになる。確かに、「御国」と「高潔なグロスター」への忠誠を唱えるソールズベリと

その息子ウオリックの態度は――とりわけ、野心に駆られる貴族たちのほとんどむき出しの自己主張のあとでは――真摯なものと感じられ、それだけ観客の共感を呼ぶものかもしれないが、二人がこののちヨークと繋がりを深くしていくにつれて、彼らに対する観客の共感もいくぶん留保されることになり、また、観客の少なくとも一部は、ウオリックがのちに「キング・メイカー」と呼ばれる存在に変貌していくことを知っていたとも考えられ、そうだとすれば、「御国」のためを思って祈る親子のひたむきな言葉も、聞く者の耳にはどこか空疎で皮肉な調子を帯びて響くことにもなる。尤も、それなりに真摯に国を思い案ずる二人がそうやってヨークと繋がっていくということ自体、見ようによれば、ヨーク側の主張に対する作者の一定の理解を示唆していると解することができるかもしれない。

けれども、国に身を捧げようという二人の誓いにこの場で表向きは同調するヨークが、二人が立ち去ったあとで口にする独白は、野心に駆られたほかの貴族たちと比べても、はるかに大きな破壊性を秘めて、遠い先を見据えた野望に貫かれている。

いずれヨークが己のものを要求する日が来よう。

それゆえ、今はネヴィル親子の側について、

思ひ上がったハンフリー公爵を愛しているふりをするのだ。

そして好機と見れば、王冠を要求するのだ。

それこそが、俺が狙いを定めた金的だからな。

思ひ上がったランカスターにも、俺の権利を侵害したり、

やつの子供じみた拳で王笏を握ったりなど、させてはおかないぞ、やつの頭に宝冠を被らせておくこともけつしてしない。

あの抹香臭い気性には王冠などそぐわないのだ。

だから、ヨークよ、機が熟すまで、しばらくじつとしていなのだ。

他人が寝ているときも、不寝の番をして、

国の秘密を探るのだ。

そして、ヘンリーが、新しい花嫁、イングランドにとっては

とんだ高い買ひ物だった妃に対する愛の喜びに倦み疲れ、

ハンフリーがほかの貴族らと激しくやり合うようになるまで待

って、

その暁には、俺は、乳白のバラを高く掲げ、

そのかぐわしい香りが大気に満ちることとなるろう……。

(一幕一場二三九行―五五行)

ヨーク派の主張そのものについては、後で『第三部』を論じる際に触れることにしたいが、冒頭の間を締め括るこの独白の中で、フランス国内の領土の喪失を嘆くヨークの言葉は、それ自体自然なものとも思われる。彼が自らを海賊たち(サフォークやヘンリー王ら)が自分から奪った金品を無残に浪費するのを悲しげに見ているしかない哀れな所有者に喩えるのも、いくぶん感傷に淫しているとはいえ、それなりに理屈が通っているようにも感じられよう。けれども、彼がその憤懣を今後自らがどう振る舞うべきかという思惑に転ずるとき、マキャヴェリを思わせるその冷徹な態度は、彼がグロスター

や『第一部』のトールボットのように、自分の命を投げ打つてでも、君主や国のために尽くそうとするような人間ではないことをはっきりと印象づけることになる。『第一部』で、正統な王位継承者と名乗り出ることを恐れられたことから、ロンドン塔に幽閉されて死の床に就いていた母方の伯父エドモンド・モートイマーを見舞う際などでもそうだったが、ヨークにはどこか高潔な心情を感じさせるものがあった、その限りでは、彼を単に野心に駆られた政治的な策士として片づけることは出来ないだろう。けれども、遠い先まで策を巡らせ、他人を自らの政治的な駆け引きのための駒としか見なそうとしないその人間観は、本人の意図するところがどうであれ、ヨークの目指す先にある世界が、トールボットやグロスターが心の拠り所としたような世界とは全く異質な世界であることを示唆している。

いずれにせよ、ここでのヨークの冷やかな思惑は、他の人物たちが巡らせる謀略と並んで、実際にそれが劇の中で実行に移される以前から、観客から見ても、護国卿グロスターを、機会あることに彼の権力と命を奪おうと目論む陰謀者たちに取り囲まれた、寄る辺なく孤立した存在として浮かび上がらせることになる。

そしてさらに、これに続く場面で、グロスターは、己の野心を満たすために彼の理想主義的な英雄像を否定しようとする大敵を、自らの身中に抱えていたことを―しかも、それは、誰よりも彼のことを良かれと思う者だったということを―思い知らされることになる。思いを遂げるためには謀反をも辞さない妻エレナーの野心は、夫を王座に就かせようとする自身の陰謀が彼の利益に適っていると信じ

るがゆえに、グロスターから見て、自分の命を狙う不倶戴天の敵の企みよりもいっそう危険で始末に負えない（事実、未遂に終わった彼女の陰謀こそが、のちのち、グロスター失脚の直接の原因となつてゆく）。権力への野望に眩んだ彼女の目には、夫の真摯な善意は「卑しく低劣な心根」としか映らない。彼女は「栄えある玉座」を熱望するが、その座に伴う―『第一部』で繰り返し想起され、トールボットの理解の中で当然の前提とされていたような―象徴的な意義や責任を、全く理解できていない。次に取るべき手立てについて思案を巡らせる彼女のおぞましくグロテスクですらある独白は、一面として、やはり王座を狙うヨークの前の場の独白と対をなしているように見える。

私が男だったら、公爵で、血筋の点で「王座に」最も近かつたなら、

躓きの石となるような連中の頭はみんな刎ねて、その平坦な首の上に乗っすぐの道を通していたるうに。

でも、女だからといって、運勢の女神が司る

芝居の中で、自分の役を演ずるのを躊躇うようなことはない。

（一幕二場六三六七行）

ここで注目すべきは、エレナーが自身の将来に思いを巡らせるのに、運勢の女神に―しかも、運勢の女神だけに―言及するということだろう。言うまでもなく、私たちはしばしば、エリザベス朝の悲劇は、

前の時代からの遺産として、人が運勢の女神の気まぐれによって富貴の身となりながら一気に落ちぶれてゆく「貴人の没落」という主題を受け継いでいることを教えられてきた(三)。けれども、改めて言うまでもなく、多くのシェイクスピアの歴史劇や悲劇の中では、王という地位は、「単にアクションの背景か、そこから人物が転落したり、あるいは、それを背景にして彼の失墜の程度が測られたりする高い地位の具現となっている」(四) 多くの中世の悲劇においてなどより、はるかに深い意義・意味合いを帯びている。エレナ―が王座に就くことの意味を単に運勢の次元でしか見ていないということは、王という地位がその表面的な偉容や権勢というレヴェルを超えて帯びる意味を見るような洞察や想像力を彼女が全く欠いていることを示唆しているが、そういった意味こそが、シェイクスピアの歴史劇の世界に深く浸透し、劇に描かれるあらゆる出来事と人物の運命に、それぞれ最終的な帰趨を配してゆくものなのである。このことは、野心に駆られた他の貴族たちにもそのまま当て嵌まる。彼らもまた護国卿や王座といった高い地位を求めながら、そういった地位に伴う意味や責任についての自身の無知・無関心に足を掬われて、没落してゆくのである。

けれども、当座のところは、いずれの陣営にとつても、ことを前に推し進めていくのは、権力の競り合いと、相手の裏をかいてこれを出し抜く技の巧みさであり、運勢の女神の気まぐれである。より大きな権力を持ち権謀術数に優れて幸運に恵まれた者が勝利して成功を収め、力に劣って運に見放された者は必然的に敗れて舞台から

去って行く。グロスターの殺害に至るアクションの展開は、まさしくこういった方向に沿って進行してゆく。エレナーは、グロスターから悔い改めるように説き聞かされても、最後まで自分に下された罰を己の罪深い行動に対する報いと考えようとしなない。彼女から見れば、それはあくまで自分と夫の政敵が仕掛けた陰謀の結果でしかない。

なぜなら、サフォーク―あなたのことを憎んで、私たち

みんなのことを憎んでいる女と組んで、何でもできるあの男―と、

ヨークと、あの不信心な坊主、罰当たりのポーフオートが、

みんなして、あなたの翼を絡め取る鳥餅を仕掛けて、

あなたがどんなにして逃げようと、必ず生け捕りにしてしまう

でしょうから。

(二幕四場五一―五五行)

皮肉なことに、エレナーのこの偏狭で「ひねくれた」見方こそが的を射ていることを、観客はあまりにもよく承知している。そして、エレナーに対して、

私が逮捕されるには、まず私が罪を犯さねばならない。

そして、私に今の二〇倍の敵がいて、

その一人一人に今の二〇倍の力があつたとしても、

私が忠義を尽くして、裏表なく、罪を犯さない限り、

そういつた者たちが私に仇をなすことなど決して出来はしないのだ

(五九一六三行)

と諭すグロスターも、自身、あとで「犬を叩く理由などすぐに見つかる」(三幕一場一七一行)、要するに、人を非難して破滅させる口実などいくらでも見つかる、と語っているように、妻に対する自分の諫言を心から信じているわけではない。実際、この短い言葉は、公爵夫人を追放の追い込んだ政敵たちが、後のヨーク派、ランカスター派の別なく、勢いに乗じてたみかけるようにグロスター弾劾を叫ぶのに対する、グロスターの反応なのだが、彼らが、そんな言葉にひるむはずもなく、彼の身の潔白を信じる王の嘆きにも一切耳を貸そうとせず、民衆の信望も厚く自分たちの権力の伸張の妨げとなるグロスターに王への大逆の嫌疑をかけて、護国卿の職を解かせると、その身柄を押さえて、すみやかに殺し屋を差し向けるのである。

にもかかわらず、陰謀の過程と結果そのものが、それがグロスターの失脚と殺害を通して否認し毀損させたはずの、階層制に基づいた社会秩序と国家の団結という理想の意義をいくぶん曖昧に、逆説的に、歪曲された形で痛切に意識させることになる。

しかし、その点を論じる前に、ここでグロスターの性格設定について少し触れておきたい。かつてエムリス・ジョーンズは、グロスターが王の面前で枢機卿とかなり不快なたちで言い争うことや、

二幕一場で、見えなかった目が奇跡で見えるようになったと称して、王らの関心を引こうとしたシンコックスとその妻に対して、グロスターが見せるいささか厳格な対応について、そういつた出来事は彼の短気な性格や為政者として謹厳すぎるといつた欠点を示していると述べた(五)。こういう見方に従えば、シンコックスに関する出来事の直後に、エレナーの逮捕の報せが伝えられたとき、グロスターに対する観客の同情は、多少は薄らいでいると論じることが出来るかもしれない。他人に対して厳しい対応を見せた以上、自身やその身内が過ちを厳しく弾ぜられたとしても、皮肉な話ではあるが、やむを得ないのではないかというわけである。しかし、シンコックスの挿話は、奇跡のたぐいを安易に信じてありがたがる王に代わって、相手の嘘を暴いたという意味で、公平な国政を司る護国卿としてむしろ評価されるべき明敏な振る舞いと取るべきだろう。そして、いくぶん短気な性格や、一部の同輩に対する個人的な敵意といった、冒頭の場面から明らかかなその短所にもかかわらず、グロスターはつねにそういつた面を抑えて、国の大義に自らを同化しようと努め、王と国を思うその気持ちは、自身を包む悲惨な状況と迫り来る身の危険の中で弱められることなく、むしろ、そういつた苦難を通して、よりいつそう深められ、強固なものとなっていくように思われる。身の破滅を前にしたグロスターが、

そして、もし私の死がこの島を幸せにし、
彼らの圧政を終わらせる契機となるなら、

心の底から望んでこの命を捧げよう

(二幕一場一四八—五〇行)

と説くとき、そこにも以前からの個人的な敵意の痕跡がないわけではないが、それでもなお、この言葉はそれまでにない真摯で深い響きを帯びて、個人的な野心にのみ駆られた者らの破壊的な力に晒された国そのものの悲憤の言葉となつている。ここで、グロスターは——少なくとも観客から見ても——国への深い思いに殉じた殉教者、失われてゆく古い共同体を象徴する存在となつており、彼が時に人間的な欠点を見せていたということが、その彼が国の大義に最終的にこのように深く同一化していくことを、そうすることに特別努力を必要とするように見えなかつたトールボットの場合よりも、いっそう人間味があつてそれだけ貴重なもののように感じさせることになる。実際、『第一部』のトールボットも、国内の貴族たちの反目のためにほとんど見殺しのような形で命を落としたわけだが、彼の場合、そういった野心に目の眩んだ貴族たちの敵意が直接自身に向けられるわけではなく、また、そのことが自分の信じてきた国や体制の崩壊に繋がっていくという実感を迫られることもなかつた。グロスターは、自分の失脚と死の先にあるのが際限のない抗争と体制の崩壊であることを認識して、身を挺してそれを阻もうとし、その中で満身創痍のような形で倒れてゆく。その意味で、グロスター殺害は、『第一部』ですでに萌芽の形で垣間見られた階層制に基づく社会秩序の崩壊の長い道程の、最初の決定的な一歩と見なすことが出来るよ

う。

けれども、先に触れたように、このグロスター殺害が実行に移されたまさにその瞬間に、それまでほとんど働きが感じられることになかつた「体制」の側からの、これに対する「応報」が動き始める。

後見役の叔父の死に茫然とするヘンリーに対して、マーガレットが口にする激しい悲嘆の言葉はいくぶん意味不明の感がある。ここで彼女は、この殺人が自分に何をもたらすのか気にかけている。

私自身については、あの人は敵だつたけれど、

流れる涙と、胸をふさぐ呻きと

血を枯らすほどのため息が、あの人の命を蘇らせることが出来る

ものなら、

高潔な公爵を生き返らせるただそのためだけに、

涙で目が見えなくなつて、呻きすぎて病に伏して、

血を干してしまつたため息で桜草のように血の氣を失つても、かま

いはしない。

世間が私のことをどう思うか知れたものじゃない。

私たち二人の交誼に何の**実**もなかつたことなどみな知つている

し、

私が公爵を亡き者にしたと見なされるでしょうし。

こうして、私の名は誹謗の舌で傷つけられ、

王侯の宮廷には私への非難が渦巻くことになるのだわ。

これが、あの人の死で私が得たものなのよ。ああ、なんというこ

と、

王妃の身で、汚名という冠を被せられるなんて。

(三幕二場五九一七一行)

観客は、マーガレットがここで世間からそう思われるだろうと自ら案ずるとおり、彼女がグロスターの失脚と殺害を積極的に画策した首謀者の一人であることを承知している。そのこともあって、グロスターの死を悼む彼女の嘆きは、自分たちの犯した行為の罪深さ、その結果の重大さに今更ながらひるんでいるというより、むしろ、ただ王を言いくるめて、自身が陰謀に加担していないと主張するためだけの、ほとんど「実のない」もののように感じられる。けれども、皮肉にも、マーガレットのこの「実のない」懸念は、本人が予想したよりもはるかに厳しい形で、すぐさま現実のものとなる。つねに「善良な」グロスターを敬慕していた民衆は、その報復として、サフォークの処刑か追放を要求して蜂起し、王は、ふだんの彼からはとても考えられない厳正で迅速な態度で、サフォークのために必死で訴えるマーガレットの願いを頑として退けて、即座にこれに同意する。

そして、この民衆の力は、全く違った形ではあるが、最終的にサフォークの命も奪うことになる。海賊との場面(四幕一場)で、サフォークは、切りつけてくる海賊たちの剣を抑えようとして、階層制に依拠する社会における自らの「地位」を主張する。

待て、フィットモア、おまえが捕らえたのは王侯で、サフォーク公ウイリアム・ド・ラ・ポールなのだ。

名もなく卑しい田悟作が。ヘンリー王の血筋、

誉れ高いランカスターの血が、こんなに卑しい

駄馬のような輩によって流されるなど、あつてはならんことなのだ。

(四幕一場四四五二行)

けれども、彼こそが、グロスターという「ヘンリー王の血筋、／誉れ高いランカスターの血」が卑しい駄馬のような輩によって流されるように謀った張本人であり、それゆえ、サフォークのここでの尊大な発言は、自身のそれまでの行いによってあらかじめ否定されている。彼がここであくまで縋ろうとする階層制に基づく社会秩序は、彼自身がすでに否認し毀損させてしまっているのである。その意味で、サフォークはその惨めな死を文字通り自ら招いたものと言えるだろう。

サフォークが追放されるのとほとんど時を同じくして、彼とともにグロスターの失脚と殺害を首謀した枢機卿ポーフォートが突然病に倒れたことが伝えられる。報せを受けた王たちが病床に駆けつけると、枢機卿は、グロスターの死に対する激しい呵責の念に苛まれて、すさまじい病苦と絶望の中で、死に神に呼びかけ、グロスターの幻影に怯え、毒薬を求め、妄想とうわごとを繰り返しながら、息

絶えてゆく。

この凄惨な死は、サフォークの結末とはまた違った形で、私たちに「応報」の力を感得させるものである。死に立ち会ったウォリックの評も無理からぬものがある。

これほどにまでひどい死は、それまでのおぞましい人生を物語っている。

(三幕三場三〇行)

サフォークの追放と死が「外面的あるいは現世的な」応報を感じさせるのに対して、ボーフォートの絶望的な死は「内面的ないしは精神的な」応報を示唆している。こうして、護国卿グロスターの殺害は、その首謀者たちを内と外、精神と肉体の両面から、破滅へと追いやってゆくことになる。批評家によっては、ここにこの劇の教訓を読む向きもあり、それ自体としては、必ずしも間違った解釈とは言えないだろう。グロスターを死に追いやった陰謀者たちはそれぞれその行いにふさわしい報いを受けて、身の破滅を招いたのである。(六)。

けれども、劇は、こういった応報を描いて終わるわけではなく、その後の展開は、むしろ、私たちにそのように割り切った見方がいかに現実にはそぐわないものであるかを見せつけることになる。グロスターの死に民衆が蜂起するというのは、それだけ見れば、確かに護国卿と王に対する彼らの愛と善意を示すものだろうが、いささか

理に落ちた批評家の言葉を借りれば、彼らはそれを通して、「力で脅迫することの旨(うま)みを知った」(七)のであり、このことが、象徴的に、後にはるかに大規模なケイドの反乱を招来するように感じられる。民衆の蜂起と海賊によるサフォーク殺しとケイドの乱という三つの出来事は、プロットの上で直接関連し合っているというわけではけっしてない。しかし、力に訴えようとする民衆の行為が、三度に亘って、そのたびに脅威性を高めてゆくかたちで表されることは、社会秩序に対するこれらの破壊行為が、根本では一つに繋がっているというこの批評家の見方を感覚的に支持しているように思われる。そして、そのことはまた、言い換えれば、護国卿グロスターという要(かなめ)を失ったヘンリーの宮廷が、国全体に対する統治能力を急速に失っていくということを指し示しているように思われる。

国の混乱に乗じて、エドワード三世の三男クラランス公ライオネルの血を引くマーチ伯エドモンド・モーターマーの息子と称して、乱を起こした仕立屋のジャック・ケイドは、金も法もない一種の原始共和制のような政治を標榜して、民衆を引き込んでゆく。

イングランドでは、これからは三ペンス半のパンが一ペニーで売られることになり、小樽一つ分の酒代で大樽一つ分の酒を買えることになるんだ。弱いビールを飲むやつはみな大罪ということにしてやろう。国中の土地はみな共有地にするんだ……。

(四幕二場六五十六行)

そして、文字が読めるという理由だけで、チャタムの町の書記を死罪にしたのを皮切りに、法曹や行政、教育に携わる知識人を次々に殺して、人々を恐怖に陥れてゆき、そのすさまじい勢いに、王自身が危険を避けるために、一時、待避を余儀なくされる。

けれども、もとより遠い将来を見通した施策の展望があるわけでもなく、その主張が明らかにするのは、秩序をもって国を治めようとする者たちを殲滅するということ以外には、ただ不定形に肥大したむき出しの欲望にすぎない。

ケイド 国で一番剛胆な貴族といえども、俺に年貢を納めない限りは、その肩に頭を乗せてはおけないぞ。国中の生娘はみな、嫁ぐ前に、その初穂を俺に捧げない限り、誰一人結婚させないからな。男どもはみな俺から直接そのおこぼれをいただくというわけだ。その女房たちには、思いつく限り、口に出して言う限り、何でも好きにさせるということを、しっかり命じておこう。

デイツク 大将、いつになったらチープサイドの市場に進軍して、手当たり次第何でも好きにいただくんです。

ケイド おっと、いますぐだ。
暴徒たち全員 おおっ、やったぜ。

(四幕七場一一九―二九行)

そして、乱は、そのすさまじい破壊と無意味な殺戮、人倫の否定ゆえに、すぐに勢いを失って、ほとんど自壊するようにして途絶してゆく。賊軍から離反して自分の村に帰れば罪を問わないという王の布告を伝えるバツキングガムの説得に、暴徒たちはおおかた、それまでの威勢のよさが嘘のように、あっさりとは離散していつてしまふ。単身逃亡を余儀なくされたケイドは、空腹に耐えきれず、近くの村の郷士アイデンの庭に入ったところで、出てきた相手に不用意に襲いかかって、逆に打ち倒される。

直前の言葉から賊の正体を知ったアイデンは、懸賞のかかったその首を持って王の許に参上して、騒擾の平定に与ったということで褒美の金を贈られ騎士の身分に取り立てられる。王は、ここでも、大きな国難が取り除かれたことで、神に感謝しその公平な裁きを讃える。

ケイドの首だと。偉大なる神よ、あなたは何と公正なことか。
さあ、生きては、私に途方もないほどの難儀を
引き起こしてくれた男の死に顔を見せてくれ。

(五幕一場六―七〇行)

それだけ独立して見れば、ここでもまた、応報の原理がそれなりに働いて、既存の秩序がひとまず回復されたように見えるということもあるかもしれない。けれども、実際には、ケイドの乱の最終的な決着を伝えるこの短い場面の前には、ヨークが自らの王位継承権を

主張するために新たに兵を起こす場面が置かれており、ここで王が一瞬思い描く秩序の回復が、全くの幻想にすぎないということは、観客の目にはあまりにも明らかである（八）。

実際、ヨークが自らの主張を公然と掲げるのはここが初めてだが、彼は、兵を率いてアイルランドに向かう前からすでに、独白で、ケイドに乱を起こさせて、それを以降の自分の拳兵に繋げると語っており、観客は、この乱の背後でヨークが糸を引いていて、乱全体が王位奪還を目指すヨークの陰謀の布石の一つにすぎないということであらじめ承知しているのである。

事実、先に引いた一幕一場の独白以来―いや、それを言うなら、むしろ『第一部』の死に臨んだモーティマーとの対話以来―折にふれて彼が独白で漏らすその意図は、グロスターの失脚と殺害も、その報いとしてのサフォークとボーモント枢機卿の死も、ケイドの乱も、すべて、王位篡奪（本人の視点からいえば、もちろん正当な王位奪還）を目論むヨークの権謀術数を駆使した―そして、その限りでは、因果応報に依拠した伝統的な道徳観とはおよそ無縁な―布石でしかなかったように見えてくる。

ヨークよ、お前の恐れる心に鎧をまとわせ、不安を決意に変えるのは、今しかないぞ。

なりたいた望むものになるか、お前が今あるものを

死に委ねるかだ。今あるものなど、あつても仕方ないからな。

青ざめた恐怖の念など、生まれの卑しい男の許に

とどめておくべきで、王たる者の心に居着かせてはならんのだ。春の驟雨より速くに思いが次々に湧いてきて、その思いが一つ残らず、王の威光を思うのだ。

俺の頭は、たゆまず糸を繰り出す蜘蛛より忙しく働いて、敵を細大漏らさず絡め取る網を張っていくのだ。

・ ・ ・ ・ ・
この悪魔が俺の代理をするのだ。

というのも、今は亡きジョン・モーティマーに、こいつ「ケイド」は、顔つきから歩き方、話し方までそっくりだからな。

このことで、民衆の思いを探って、連中がヨークの家とその主張をどう見なしているか、わかろうというものだ。

やつが捕らえられて、拷問にかけられたとしても、その程度の責め苦のために、俺にけしかけられたなどと

口を割るようなやつではないことはわかっている。

仮にやつがうまくことを運べば、というのも大いにありそうなことだが、

その時はその時で、俺がアイルランドから軍勢を引き連れ帰還して、

このごろつきが蒔いた種で得られる実りは、俺がすっかり刈り取るまでだ。

（三幕一場三三二―三三二―八一行）

この言葉通り、軍勢を引き連れてアイルランドから帰還したヨークは、かつてグロスターの殺害に憤慨した民衆がサフォークの処分を要求して蜂起したのと、かたちとしてはそっくり同じく、奸臣サマセットが王を牛耳っているのが容認できないということを根拠に、挙兵する。王からの使者として交渉に当たったバッキンガムから、王がヨークの主張を容れてサマセットをロンドン塔に送ったと聞かされて、挙兵の口実を失ったヨークは、不本意ながらいったん兵を解いて、王の許に参上するが、そこにサマセットがいるのを見て、憤りを露わにして、公然とヘンリーの王権を否定して、相手の為政者としての無能ぶりを挙げて、自分こそが名実ともに正統な王位継承者であると主張する。

不実な王め、俺が侮辱にとうてい耐えられないと知りながら、なぜ信義に背いたのだ。

俺はお前を王と呼んだのか。いいや、お前は王などではない。衆を治めることも支配することも出来ず、毅然として

その前に立つことすら出来ず、謀反人一人抑えることも出来ないではないか。

お前のその頭には王冠など似合いはしない、お前の手は巡礼の杖をつかむように出来ており、畏れ多い君主の笏に触れることなどあってはならない。

その黄金の冠は、アキレウスの槍のように、微笑むか眉を顰めるかで、人を殺すも生かすも自在に出来る

俺のこの額の周りを包むのこそがふさわしい。

この手こそが笏を掲げて、その笏で

法による支配を体現できるのだ。

さあ、座を譲れ。天に賭けて、その天がお前の支配者として

造り給うた者を、もうこれ以上支配などしてはならない。

(九一—一〇五行)

これに続いて、周囲の者たちもそれぞれ二派に別れて、激しく言い争い、こうして、バラ戦争の幕が本格的に切り落とされることになる。

先にも見たように、護国卿グロスターの失脚と殺害は、首謀者であるサフォークとポーフォート枢機卿の無残な死を招き、大規模な反乱を企てて、無益な殺戮を繰り返したジャック・ケイドは、村の郷士としての自らのありように満ち足りたアイデンの前に、あえなく最期を迎える。

主よ、これほど静かな散歩道を楽しむことが叶いながら、

浮き沈みの多い宮廷での暮らしを選ぼうとする者などいまいしよ

うか。

父親が私に遺してくれたこのささやかな土地だけで

私にはもう十分で、王国も同然だ。

他人をおとしめることで、自分だけ大きくなるうなどは思わな

いし、

どんな妬みを買つても、富を集めたいとも思わない。

自分のこの暮らしを續けて、戸口にやつてきた貧者を

うれしい気持ちにして歸してやれたら、それで十分なのだ。

(四幕一〇場一六一―三行)

こうして、劇は、一方で、伝統的な社会の秩序と道徳を守ることの大切さを繰り返し訴えて、それに背いた人間に下される応報の恐ろしさを重ねて説いているように感じられる。しかし、そういった応報の力が示されるそのたびに、さらに大きな陰謀、暴動、内乱が頭をもたげて、かろうじて回復されたはずの平穩な生活を呑み込んでゆく。そして、そのたびに、劇の初めから王座への野心を吐露していたヨークの言葉がしだいに現実味を帯びていって、後から振り返ると、これらの陰謀も乱もすべて、ヨークのマキャヴェリ的な企てを実現させるための布石として置かれていたという印象に変わってゆくのである。そして、今や誰の目にも露わになったその企てと、それに力に対抗しようとする王妃らのむき出しの憎悪を前にしては、伝統的な道徳も応報の觀念も、もはやあまりにも非力で見当違いのものとししか映らない。

両派が激しく言い争つた後で時を措かずに始まった戦闘では、準備の整つていたヨーク派が勝利を収め、サマセットもクリフオードの命を落とすが、それはけつしてヨーク派の勝利を決定づけるものなどではなく、いわんや、ヨークの主張に分があつたということを示すものでもない。血で血を洗う両派の本格的な闘争はまだ始まっ

たばかりであり、そのまま、信義も道徳も顧みない、国中を巻き込んだ壮絶な戦いを描く『第三部』へとなだれ込んでゆくのである。

第四章 『ヘンリー六世・第三部』

『ヘンリー六世・第三部』の中で、シェイクスピアは、王であるということの意味を、付随するさまざまな事柄も含めて、初めて正面から向き合つたと言えよう。私たちがここで立ち会うことになるのは、『第一部』『第二部』を通してますます勢いを増す破壊的な力にさらされてきた王を頂点とする社会体制が、音を立てて崩れ落ちて、その巨大な渦に、国中のあらゆる成員が巻き込まれて、一切の人間関係がその最小の単位に至るまで急激な破綻に追い込まれるさまである。

王位継承権に関するヨーク派の主張は、言うまでもなく、この芝居に描かれた内乱の背景をなしているが、その主張の正否については、シェイクスピアは何らかの明確な判断を下しているようには見えない。この王位継承権の議論は、史実に関わるもので、本論で正面から取り上げるべきものとも思えないが、背景の理解のために、ごくかいつまんで纏めておくと、一三七七年にイングランド王エドワード三世が死去すると、王位は、その前の年に亡くなったエドワード黒太子(三世の長男)の子で、当時九歳のリチャード二世が継承する。しかし、リチャードは、その失政のために貴族らの離反を招き、エドワード三世の四男ジョン・オヴ・ゴントの子ヘンリー・

ボリングブルックが兵を起こして、リチャード二世を廃位して、自身がヘンリー四世として即位する。ヘンリー四世とその子五世は、優れた政治的な手腕によって国内の不満を抑え込んでいたが、五世が若くして亡くなって幼い息子がヘンリー六世として王位に就くと、エドワード三世の五男の血筋に当たるヨーク公リチャードが、母（モーターティマー家出身のアン）がエドワード三世の三男クラランス公ライオネルの血を引いているということを根拠に、自身の王位継承権の方が、ヘンリー六世の継承権より優先されると主張するようになる、というものである。

シェイクスピアがヨーク派の主張を必ずしも間違つたものと見なしていないというのは、『第一部』、『第二部』を通してこの問題を公平に扱っていることから推察できよう。これを訴えたりそれに賛同したりする人々は、死に臨んだモーターティマーにしても、ヨーク自身にしても、あるいは、ソールズベリやウオリックにしても、ただ浅ましく血に飢えた悪漢として描かれているわけではなく、さまざまな機会に、他人や国に対して真摯で心のこもる気遣いを見せていた。ヨーク派の主張に対するこういった扱いは、『第三部』でも基本的に変わることはない。その意味で、冒頭の議会の場面はいかにも興味深い。当初、エクスター公は、ヨークが王ヘンリーの面前で王座に座つたその傲慢な振舞いを厳しく責めるが、議論が進むうちに、自身ヘンリーと個人的にきわめて親しい間柄であるにもかかわらず、彼はその「良心」に従つてヨーク派の主張の正当性を認めざるを得なくなる。

けれども、改めて言うまでもなく、シェイクスピアはヨーク派の主張の正当性を訴えるために芝居を書いているわけではない。リチャード二世がボリングブルックに王座を譲つたというのは、実際の歴史においても微妙な問題であり、のちのシェイクスピアの『リチャード二世』（二五九四）の中でも、その正否について明快な判断が示されることはない。劇作家と私たちにとつてより興味を引く点は、こういった微妙な一そして、おそらくそれ自体としては不毛な一議論ではなく、その議論に人々がそれぞれどのように反応するのかという点であり、より一般的には、ヨーク派とランカスター派の血に染まつた果てしない対立に象徴されるような、何らかの普遍的で疑問を挟む余地のない行動原理を欠いた混沌とした世界にあつて、人はどういふ道を選んでゆくのかということである。

冒頭の場面は、他のシェイクスピア劇の多くと同様、いくつかの点でかなり重要な主題上の意味を帯びていて、とりわけ注意深く検討するに値するだろう。今後王座をどう扱っていくのかということに関して、ヘンリーが提案した、自分が生きているあいだはそのまま王座にとどまつて、その後は、ヨークとその子孫に王位を譲るといふ妥協案は、その場でヨークの同意を得られたものの、あまりに弱腰の対応ということで、ランカスター派の家臣のあいだで、王自身に対する厳しい批判を招く。しかし、ここにヘンリーの温厚すぎずて柔和な性格とどこか臆病な気性が働いているのは確かだが、彼がここで取る選択は、それ自体としては、彼の道徳原理の自然な結果であるように思われる。理詰めで迫られて、彼は心の内でこう認め

ている。

どう言えばいいのかわからない。私の権利は根柢に乏しい。

(一幕一場一三四行)

それゆえ、自らを取り巻く状況に押し切られた面はあるにしても、彼自身が自分に王位に就く正当な権利はないと感じている以上、ヘンリーのように道徳的に潔癖な性格の人間にとって、何らかの形で譲位するというのは避けがたいものだろう。一方で、ヘンリーの提案によってヨークが得るものは、ヘンリーが得るものよりはるかに大きいとはいえ、彼も、即座に力づくで王冠を奪おうと思えばそう出来たようにも見えるにもかかわらず、ヘンリーの妥協案にひとまず同意して、それ以上の実力行使を控えるというのは、双方の信頼関係に対して彼なりに一定の敬意を表わしたものと取れ、その分、観客には好ましく感じられるようにも思われる。このように見てくると、この協定は、武力を背景とする現実政治が浸透してくる中で、それでもなお、古い社会秩序に感じられたような道徳原理がかるうじて残っていたことを示しているとも言えよう。

ヘンリーのこの王として「自然な」提案は、しかし、彼が父親としては「自然に背く」ことを意味している。

ヘンリー……私は自然に背いて、息子に権利を残さないことに

なるな。だが、ままよ。

(一九二―九三行)

マーガレット ああ、なんてたわけた人なの、あなたがこんなに自然に悖る

父親となるのを見るくらいなら、処女のまま死んでしまつて、あなたになど会わずに、あなたに息子など産まない方がずっとよかつた。

(二一六―一八行)

強固な階層制を理想とする社会では、一家の長としての父親の役割は、一国の長としての王の役割とそのまま照応し合っていてしかるべきである。ヘンリーの中でこの二つの役割が両立し得ていないということは、それ自体、王を頂点とする階層制の深刻な破綻を意味しており、王の心理的な未熟さを浮き彫りにすることになる。実際、状況はさらに深刻である。怒り狂うマーガレットの激しい叱責に対するヘンリーの答えは、どうにも愚かしく、どこか卑しいとすら感じられる。

マーガレット、赦しておくれ。赦してくれ、王子。

ウォリック伯と公爵が無理強いしたんだ。

(二二八―二九行)

そして、王妃と息子が行ってしまった後で、彼はいかにも弱々しげに期待の念を口にする。

マーガレットがああ憎たらしい公爵に復讐してくれるかもしれない。
ない。

あの男の傲慢な精神は、欲望の翼に乗って、
わしの王冠に狙いを定めて、腹を空かした驚のように、
わしと息子の肉を引き裂きにかかってくるのだ。

(二六六―六九行)

王のこういった態度は、いくぶん観客の同情を引くということはあるかもしれないが、それはまた同時に、家と国の長として彼のうちに潜む一種の無責任さを露呈せずにはおかない。もし彼が王位継承権についてのヨークの主張が正当で尊重されるべきものであると心底納得したのなら、彼はその態度を自分の妃と息子の前でも変えることなく保たなければならない。無理強いされたのだというその弁解と、マーガレットがヨークに復讐してくれるかもしれないという怠惰な期待は、結局のところ、彼の妥協案が反乱軍への恐怖の念から出たもので、自身明確にそのように意図していたわけではなかったにせよ、中身としてはその場しのぎで実のないものにすぎなかったということを浮かび上がらせることになる。それに続く場面では、ヨークも息子たちから煽られるようなかたちで約束を反故にしているのが露わになる(この背信が実行に移される前に、マーガレット

に率いられた軍勢がヨークの城を急襲するが、観客の視点からすれば、ヨークが信義に背いたことに変わりはない)から、王だけを言葉に実がないと責めることは出来ない。けれども、彼の王としてのこういった責任感の希薄さは、究極的に―そしてまた、象徴的に―国全体の人間関係の完全な崩壊に繋がってゆくことになる。その意味で、彼は階層制に基づく社会秩序の破壊に積極的に加担するわけではないが、国と家の長としてそれを維持することが最優先の責務であるのにそれを怠ったという点で、消極的な形であるにせよ社会秩序の崩壊に手を貸したという責めを負わなければならない(一)。
そして、ヘンリーが国の統治を半ば投げ出したとき、道徳原理の真の崩壊が始まる。次の場面で、誓約を反古にして、自らの「正当な」権利を改めて主張することにいくぶん躊躇いを見せるヨークに、長子エドワードはこう言い放つ。

けれども、王国を得るためになら、どんな誓いも破られていいのです。

私は、一年間国を治めるためになら、千もの誓いだって破るでしよう。

(二幕二場一六一―七行)

そう言うことで(そしてもちろん、そうすること)、彼らは―そして、同様に誓いを破るランカスター派の面々も―『第一部』以来、

折に触れて顔をのぞかせるその野蛮さを曲がりなりにも抑制してき
た一つの境界線を、いとも容易に、そして陽気に、乗り越えてゆく。
それに続く、内乱を劇化した長い一連の場面は、私たちの眼前に、
完全に倫理観を麻痺させてしまった人々の蛮行を展開させてゆく。
『第二部』の終わり近くで、クリフォードが殺された父の亡骸を
前にして立てた非道な誓いは、ここで徹底的に実行されてゆく。

この光景に前にして

俺の心は石と化したぞ。そして、俺のものである限り、

この心は石のままだ。ヨークは老人にすら手加減しなかった。

それなら、俺も奴らの赤子にも手加減しないぞ。生娘の涙など、
俺には、炎に振りかけられる露同然だ。

暴君の心もしばしば正す美貌ですら、

燃え上がる俺の怒りには、油と亜麻布となるだろう。

これからは憐れみの念など一切関わりなしだ。

憤怒の鬼と化したメディアが幼いアブシュルトスを切り刻んだ
ように、

俺も、ヨーク家の餓鬼を見つける度に、

一口で頬張れるほどの肉片に切り刻んでやるのだ。

これから俺は残酷さで世に名を知らしめてゆくぞ。

〔『第二部』五幕二場四九一六〇行〕

何の罪もなく抵抗することもない幼いラットランドが命乞いする

いかにも哀れな言葉も、クリフォードの心には何の呵責も生じさせ
ることはない（一幕三場）。恐ろしいのは、彼が無力な子供を殺すと
いう事実そのものではなく、自らの行為に対する彼の反応の仕方だ
である。最初の犠牲者の血では全く飽き足らず、さらなる血を求めて、
彼は憑かれたように言う。

プランタジネット、さあ、行くぞ、プランタジネット。

俺の剣の刃にこびりついたお前の息子の血は、

さび付いても、このままにしておこう。お前の血が

これと混じり合って、俺が両方ともいっぺんに拭き取るまではな。

（二幕三場四八五行）

ヨークがめつた突きに殺される次の場面はいつそうすさまじい。マ
ーガレットとクリフォードは、ヨークをじわじわ責め苛んで、その
残酷な狂態に我を忘れてゆく。涙を拭くようにと、ラットランドの
血に染まったハンカチを差し出し、相手の頭に紙の冠を被せて、敬
つてみせて愚弄する。

マーガレット　お願い、ヨーク、猛り狂って、楽しませて。

．．．．．
お前は怒り狂うべきよ。

お前を怒り狂わせるために、私はこうやってなぶっているの
よ。

地団駄踏んで、わめき立て、歯ぎしりしてちょうだい、そう

すれば、私は歌を歌って舞ってみせるわ。

(一幕四場八六一―九一行)

自らの残虐さに酔いしれて、復讐と憎悪の鬼と化した彼らは、儀式の法悦に浸るようにして、代わる代わるヨークを刺してなぶり殺しにする。

言うまでもなく、こういった蛮行はランカスター派に限られるものではない。後に、クリフオードの死体を前にして、勝ち誇ったヨーク派の面々も、同じように戯れに供養を執り行って、その残虐さを露わにする。

リチャード クリフオード、慈悲を乞え、でも、赦しなど期待するんじゃないぞ。

エドワード クリフオード、悔い改めるのだ、お前の後悔など何の足しにもなるまいが。

ウォリック クリフオード、悪事の言い訳でもよく考えておくんだけぞ。

ジョージ こちらは、お前の悪事を責める拷問の道具でも考えておいてやるからな。

リチャード お前はヨークを愛してくれたな、そして、俺はそのヨークの息子だ。

エドワード お前はラットランドを哀れんでくれたな。俺はお前

を哀れんでやろう。

ジョージ お前を守ってくれるマーガレットの御大将はどこなんだ。

ウォリック 皆がお前のことをからかっているぞ、いつものように悪態をついたらどうだ。

(二幕六場六九七―七六行)

シェイクスピアの歴史劇の中では、さまざま儀式がくりかえし執り行われるが、これらもそういった儀式の例、他の人間に対する憎悪で凝り固まった人々の団結の儀式と言えよう。けれども、これらの儀式を通して達成されるものは何一つない。彼らの「共同体」では、何らの功績が称えられることも、どんな価値が再生されることもない。それどころか、そこから浮かび上がるものは、激しいエクスタシーを通して得られる表面的な団結の裡に潜む癒やしがたい孤独の深さであり、『第一部』の結末で、ジョーン・ラ・プッセルの処刑に際して、必死で自身と胎児を守ろうとするジョーンを嘲笑する人々に感じられたのと同様の(だが、比較にならないほどの大きさで)他人の悲惨な状況に同情できない彼らの不幸である。エムリス・ジョーンズが指摘したように、「自然な感情、心を動かされる能力は、弱さではなく、強さの徴である。そして、最後に、ヨークを惨殺すること、マーガレットとクリフオードは、勝者というよりむしろ敗者に見え、その犠牲となった者よりいっそう深く打ち負かされているように見える」(二)。

この人間性と人間関係の崩壊は、ある意味で、劇の最後まで変わることなく進んでいって、その無様な様相をさまざまに描き出してゆく。知らずにはいえ、父親は息子を殺し、息子は父親を殺し、彼らはそれぞれ自分が手をかけた相手の持ち物を身ぐるみ剥ぎごうとする。家臣は、かつて忠誠を誓った王を捕らえて捕虜にする。

けれども、この徹底した崩壊の過程を通して、人間の高潔さが、大きな産みの苦しみを伴いながら、一つの可能性として、躊躇いがちに生まれつつあることが暗示されている。

これまで、『三部作』全体の題名になっており、その意味では、『三部作』の主人公とも言うべきヘンリー六世については、簡単に触れた程度で、正面から取り上げることにはなかった。ここで、彼についてももう少し詳しく検討しておくことにしよう。『第一部』以来つねに、周囲の人々に対する彼の善意と篤い信仰心に疑いの余地はないものの、差し迫った状況に対するヘンリーの反応はしばしば的外れで、実効性のないものだった。全体を通してシェイクスピアがヘンリーのことを否定的に扱っているとは考えにくいが、時に彼の思慮の乏しさと指導力のなさが事態をいっそう紛糾させ、観客のあいだにも苛立ちや不満を生じさせていたということは否定できない。例えば、彼は、会ったこともない女性と結婚するためだけに、それに伴う状況の悪化なども一切顧慮しないで、フランスの有力な貴族との約束を反故にしてしまい、またグロスターに罪がなく誠実な人柄であることを微塵も疑うことなく、護国卿の失脚を心底嘆きながら、ほか

の連中が彼に襲いかかるのを、自身、

罪のない仔牛が牽かれてゆくのを見て、

母牛がただモーモーと鳴きながら走り回って、

大切な子が失われるのを嘆くしか出来ないように、

私も、善良なグロスターが追われるのを、悲しく

詮のない涙とともに嘆いて、泣き暮れた目で見送るだけで、

ためになることなど何一つしてやれないのだ

（『第二部』三幕一場二一四―一九行）

と認めるように、ただ手をこまねいて、おろおろと見ているだけだった。

信心深く機敏さに欠けるといふこの王の性格は、『第三部』でも基本的に変わりはない。むしろ、彼を取り巻く状況がいっそう切迫して危険の度を増すにつれて、彼の的外れな信心深さと統率力のなさは、冒頭の場面との関わりで見たように、味方の人々や観客の眼にはいっそう苛立たしく、ほとんど耐えがたいものと感じられるようになってゆく。実際、重要な瞬間や戦場などでは、マーガレットやクリフォードのような実務的な人間には、ヘンリーがその場にいること自体が重荷に感じられる。

クリフォード 陛下は戦場から離れていくくださる方がよろし

いかと。

陛下がおられない方が、王妃様も戦果がめざましいご様子です。
すので。

マーガレット ええ、そうなさって。武運は私たちにお任せくださいな。

ヘンリー 何を言うんだ。それは私の武運でもあるのだから、私もここに留まるぞ。

ノーサンバラランド それなら、戦う決意を持ってお留まりください。
さい。

(二幕二場七三―七七行)

ヘンリー 諸侯よ、口を謹んで、私の言うことを聞くんだ。

マーガレット それなら、この連中にはつきりおっしゃってください。さい。そうでないなら、黙っててください。

ヘンリー 私の言葉に制約を設けるようなことはしないでくれ。私は王であり、話す特権があるのだから。

クリフォード 陛下、この談判を必要とする傷口は言葉で癒やすことが出来るものではないのです。ですから、どうぞお静かに。

(一一七―一二行)

エクスター お急ぎを。復讐の神が奴らとともに迫って来ているのです。

立ち止まって理屈をこねるのはやめてください。急ぐんです。

さまなければ、後から来てください。私は先に行きますから。

(二幕五場一三四―三六行)

にもかかわらず、ヘンリーが一連の難儀と喪失を経て、敵味方の双方によるほとんど全面的な否認に晒されながら、なおも自分なりの王としての理想を貫こうとするとき、それは単に、彼が外的世界の現実を無視して、やみくもに自らの理想にすがっているということの意味するものではない。『第二部』で、ヨークの蜂起に対する当座の対応策を決めた後で、彼は言う。

さあ、中へ入ろう、マーガレット、そして、よりよく治めるために学ぼう。

『第二部』四幕九場四八行)

この脈絡で、彼が本当に「よりよく治めるため」の知恵を何か学んだのかは疑わしいが、その後も次々と襲ってくる苦難を通して、彼は実際に「何か」を学んでいって、彼の愚かしい姿は、しだいに、野心に取り憑かれた他の貴族たちには全く感じられないような、「君主」としての威厳を帯び始める。

ヨーク派の人々からは王としての權威を公然と否認されて、味方の人たちからはほとんど厄介者のように追い立てられて、彼は自身亡くなるか王でなかつたらと願ひ、羊飼いででもあったならといくぶん逃避的な白日夢に浸る。

神の御心に適うなら、このまま亡くなってしまいたいものだ。

実際、この世に悲しみや苦しみ以外に何があるというのだ。

ああ、神様、いつそただの貧しい牧夫として

日々を過ごす方が、ずっと幸せなのではないでしょうか。

(二幕五場一九―二二行)

しかし、それでも、ヘンリーはつねに彼なりの方法で王としての責任を全うしようとする。自分の父親を殺してしまった息子と、自分の息子を殺してしまった父親が、それぞれ亡骸を前に泣き悲しむのを見て、ヘンリーは、自身泣き崩れてしまう。

ああ、私の死でこの悲しい行いを止めることが出来ればよいものを。

慈悲を、慈悲を、天よ、どうか慈悲を賜らんことを。

・ ・ ・ ・ ・

かつて王が臣下の悲しみにこれほど悲嘆に暮れたことがあっただろうか。

お前たちの悲しみは大きい、だが、私の悲しみはその十倍も大きいのだ。

(九五―一一二行)

言うまでもなく、ヘンリーがこのように深い同情を示すからといっ

て、状況が癒やされるというようなことは何一つないが、それでもなお、このように臣下の人々の苦しみや悲しみのすべてを、彼らとともに心の底から泣き悲しむことが、彼にとって王としての責任を誠実に果たす方法なのである。

後に、エドワード四世の最初の治世の下で、ヘンリーは、ただ「純粹に愛の念から、私自身の国に挨拶するために」、身を寄せていたスコットランドから一人変装して戻ってきて、ほとんど直後に捕らえられてしまう。この出来事は、彼が自分の身の安全を全く顧みないことを示して、苛立たしいほど間が抜けているというヘンリーについての見方を改めて確認するものである。しかし、それはまた、いかに甲斐のないものであるとも、ほかの誰のものよりも深い、国に対する彼の愛の証しなのである。かつて自分の臣下だった森番たちに捕らえられ、王冠も被っていないのだから、もう自分たちの王ではないと否認されて、彼は言う。

私の王冠は、頭の上ではなく、心の内にある。

それは、ダイヤモンドやインドの宝石で飾られていることもなければ、

目に見えることもない。私の王冠はやすらぎと呼ばれており、それは世の王たちがほとんど享受することのない王冠なのだ。

(三幕一場六一―六五行)

命まで脅かすような残酷な現実には晒されながら、ヘンリーは自分の

心はやすらかだと語る。この道徳的な高潔さと心の平静さこそが、第一章で述べたように、一五九〇年代初期、社会秩序の崩壊がしいにはつきりと感じられるようになって、社会の一人一人の成員が依つて立つ基盤そのものが失われつつあるようにすら思われた時期に、シェイクスピアが、人々がそれぞれ裡に持つべきものとして思い描いたものだったのではないだろうか。実際、この内面の平静さ、心のやすらぎは、ヘンリーの後に来るすべてのシェイクスピアの悲劇の主人公たちが、その存在を賭してでも得ようと努めるものと言つても過言ではない。トールボットとそしておそらくグロスターもこういつたやすらぎを裡に持つていたと言えるかもしれない。しかし、彼らは、ヘンリーが社会秩序の頂点に立つ君主としてこうむるような、秩序に対する信頼の根拠と、それゆえにまた、自身の存在の根拠の、ほとんど全面的な喪失を経験することはなかった。そういった経験を経てなお心のやすらぎを保ち得たヘンリーは、その意味で、シェイクスピアの悲劇的なヒーローの一つの原型、彼に続く悲劇の主人公たちが心のどこかで追い求め続けたありようの一つの具現だったと言えるのではないだろうか。

自分が一時的に王座に返り咲いた際に、ヘンリーはそれを神の御業に帰すが、観客は、それが貴族間の反目や政治や軍事の力関係の結果でしかないことを、あまりにもよく承知している。そして、自分も公正で温情あふれる治世を敷いているから、最も安全だとヘンリー自身が感じていたまさにその瞬間に、ヨーク家のエドワードは、兵士からも民衆からも何の抵抗を受けることもなく、彼を捕らえて

しまふ（四幕八場）。しかし、だからといって、それがなんだというのか。神の働きが観客には見えないからといって、彼の善政を理解して彼の大義を守ろうとする民衆が一人として残されていないからといって、それがなんだというのか。彼が自身の行動原理を最後まで守り通して、この大義に殉じて死んでゆくという、それだけで十分なのである。自分を殺そうとする相手が赦されるよう神に祈る、彼の最後の言葉は、この見方を裏づけている。

ああ、神よ、私の罪をお赦してください、そして、お前も赦されま
すよう。

（五幕六場六〇行）

しかし、当然のことながら、『第三部』は、ヘンリーの王としての精神的な成長や内面の深化を描くために作られた芝居ではない。社会秩序の崩壊は最終段階まで進行していつて、そのため、逆に、劇の後半ではその破壊力は前半ほど激しくは感じられない。劇の後半はむしろ静まりかえつたような印象で、どこか平穏な雰囲気すら漂わせており、アクシヨンの展開は、秩序の再建に向けられているようにも見える。けれども、そこにはまた、いったん崩壊した社会秩序をその底辺から再建しようとする努力のいかに虚しいかを如実に示す要素も見え隠れしている。

誰でも気づくように、この劇は、第二幕の終わりにエドワードが初めて王座に就いたところで、いったん終わつて、ヨーク派の人々

は、内乱は自分たちの勝利でほとんど終わったと信じたがる。ウォリックは新たに王座に就くことになったエドワードに余裕ありげに助言する。

というのも、奴らにはもうこちらを傷つけるほど強く刺すことなど出来ないが、

それでも、あなたの耳を悩ませる程度に、ぶんぶん唸らせておくことです。

(二幕六場九四―九五行)

けれども、この表面的な平和の回復にもかかわらず、かつてトールボットに体现されて、社会秩序を根幹において支えていたような、王と臣下との強い絆や国に対する責務の感覚は、ここではもう完全に失われている。王座に就いたエドワードは、初対面の未亡人に魅せられて、使節を送ってフランス王の義妹に申し入れていた一国の君主としての求婚を、この結果など一切顧慮せずに、簡単に反古にしてしまう。そして、弟たちの意向を無視して、位の高い女性を新しい妻の身内に嫁がせて、弟たちに対する気遣いの欠如を露呈する。同様に、クラランスも、完全に個人的な事情だけで、兄である王を裏切つて、敵側に寝返つてしまう。そして、エドワードの許にとどまるもう一人の弟リチャードは、実際には、最も危険で自然に悖る野心を裡に秘めている。

それはもう、エドワードなら女たちを丁重にもてなすだろうさ。願わくば、やつが骨も髄もすっかりとろけて、

やつの腰から期待の小枝などが伸びてきて、

俺が狙う黄金の時に至る妨げになることなどないように。

しかし、それでも、俺の心からの望みと俺とのあいだには、

色狂いのエドワードが王座から転げて地中に埋まったとして

まだクラランスと、ヘンリーと、その幼い息子のエドワードがい

て、

その上に、奴らの身中から繰り出してくる

願い下げの餓鬼どもがその後釜に控えていて、

俺がその座に就くのを妨げようというのだ。

・ ・ ・ ・ ・

そして、俺は「……」

イングランドの王冠を得ようと、我が身を苦しめ苛んでいるのだ。

その苦しみから自身を解き放つか、さもなければ、

血まみれの斧で自分の道を切り開くかだ。

そうとも、俺はにこにこ笑つて、笑いながら人を殺すことも出来るし、

憤懣やるかたないことに、「異論はないぞ」と叫びも出来る。

偽りの涙で頬をぬらし、

あらゆる事態に表情を沿わせてみせる。

船乗りを誘惑して溺れさせることなら人魚にも負けないし、

見つめる者を殺すことならバシリスクも形無しだ。

カメレオンより多彩に色を変え、
変装の神プロテウスよりうまく姿を変えて、

人殺しのマキヤヴェリにそのやり口を指南してやるのだ。

(三幕一場一二四―九三行)

一見したところ壮麗で、儀式的な雰囲気を漂わせる場面でも、人物たちを背後で支える動機はあくまで自己中心的、利己的なままで、国全体の安寧や公正で一貫性のある行動原理といったものは全く関心の埒外である。フランス王ルイス(ルイ)とマーガレット、ウオリックが一堂に会する場面(三幕三場)は、こういった例の一つである。冒頭から、ルイスはマーガレットの立場に深い敬意を示して、彼女の訴えにも真摯に耳を傾け、助力を約束する。しかし、そこにエドワードの使節としてやってきたウオリックが現れて、ルイスの義妹ポーナを王妃に迎えたというエドワードの希望を伝えると、ルイスはすぐにその気になって、マーガレットのことも彼女のそれまでの訴えもほとんど無視してしまう。ルイスの選択を決定するのは、ヘンリーがいかにも彼らしい冗漫さであらかじめ鋭く予測していたように、それぞれの主張・大義の正当性ではなく、ルイス自身の個人的な利害である。

でも、マーガレットは乞うために、ウオリックは与えるために、行くのだ。

彼女は左手に立って、ヘンリーへの助力を願っているのだし、あの男は右手に立って、エドワードへの妻を求めているのだ。

そして、結論としては、王の妹を娶るといふのと、

その他いろいろの約束で、あの男が王の心をマーガレットから翻させて、

エドワードに力を与え支援する気にさせるということだ。

(三幕一場四一―五一 行)

同様に、ルイスが最終的にマーガレットを支援することを誓うのも、改めて彼女の言い分に納得したからでも何でもなく、求婚のために自分の許に使者を送りながら、直後に別の女性を妃に迎えるなどして自分の顔に泥を塗ったエドワードに対する個人的な憤怒の念からすぎない。そのことは、ウオリックについていっそうよく当て嵌まる。かつて『第二部』で国に対する深い気遣いを見せたウオリックは、ここで、妃を迎える使者として自分を送り出しておきながら、その派遣先の王と自分の面前で妃は既に別に迎えたからその必要はないと伝えるという、耐え難い侮辱を自らに働いたエドワードへの個人的な憤りから、その直前にヨーク派の王位継承権の主張がいかに正当なものか熱心に説いていたにもかかわらず、その場で即座に、不倶戴天の間柄だったランカスター派に寝返ってしまう。それゆえ、

この場面は、これら三方の当事者の団結とヘンリーの息(そく)エドワード

王子とウォリックの娘との婚約という形で、いかにも壮麗な雰囲気
で締め括られているが、それぞれの振る舞いの背後にあるのは、そ
ういった儀式性とは裏腹に、完全に個人的な利害と怨嗟でしかない。

劇の後半のアクシオンを結末へと推し進めていくものは、本質的
に、軍事的な力と政治的な駆け引きでしかなく、その駆け引きの背
後にあるのは、個々人の行動を動機づける純粋に私的な利害でしか
ない。クラランスが再びエドワードの側に寝返る際に、彼自身はそ
れを兄弟としての愛に帰すが、そうする際に、彼は自分の義父であ
るウォリックのことを、公然と、そしてきわめて不快な形で挑発す
る。そして、これを兄弟にふさわしい行いとして歓迎するリチャー
ドは、実際には、その兄を陥れ殺そうという、兄弟には最もふさわ
しからざる意図を秘めた人物なのである。

このほとんど完全に利己的な世界にあつては、人の死に方も、そ
の生き方とよく符合している。戦場で致命傷を受けたウォリックは、
いまわの際に、これまで自分がものにしてきた荣誉・栄光を振り返
るが、そのことで改めて己の死の現実を思い知らされる。

俺が所有していた莊園も、小径も、屋敷も、

まさにいま俺を見限り、持っていたすべての土地のうちで、

俺に残されたものといえは、体一つの長さだけだ。

いったい栄華も、支配も、統治も、土とあくた以外の何だとい
うのか。

俺たちがどんなふう生きようと、最後は死なねばならないの

だ。

(五幕二場二四二八行)

「貴人の没落」の伝統に則ったこの言葉は、言い古されたものとは
いえ、この脈絡ではいかにも印象深いが、そこには、『第一部』でト
ールボットが最後に心の拠りどころの一つとしていたような、自身
が名声という形で再び地上に蘇るといった可能性は、全く感じられ
ない。自分の避けがたい死を前にして、ウォリックは最後の支えと
して、弟の愛に縋ろうとする。そして、その弟がすでに亡くなった
ことを聞かされて、その魂の安らぎを祈るとき、ウォリックは、絶
対的な孤独という耐え難い苦しみからかうじて解かれて、来世へ
の希望を通して、最後の心の平安を得るのである。

この荒廃を極める内乱を最終的に勝ち抜いたヨーク派の人々も
勝利を享受しているようにとはとても見えない。彼らは自分たちが人
間性の崩壊のレースを最後まで走り抜いただけだということをわか
りすぎるほどわかっている。エドワード王子を惨殺した後で、リチ
ヤードがマーガレットを手にかけてしようとすることを押し止めて、エド
ワード王は言う。

よせ、リチャード、よすんだ。俺たちはもうやりすぎたのだ。

(五幕五場四三行)

彼らですら、それ以上蛮行を重ねるには、もう消耗しきっているの

である。

ここで、シェイクスピアの英国史劇再評価の転機となったとされる一九七八年の王立シェイクスピア劇団による上演についての当時の劇評の一節を引いておきたい。

この三人の殺し屋にとつて、怒りと報復の源泉は、突然、王子を殺すことで、完全に干上がってしまった。王妃がゆっくりと離れていく中で、エドワードが「リチャードはどこへ行ったのだ」と尋ねるのに、クラランスが答えて言う。

全速力でロンドンへ発ってしまった。たぶん

ロンドン塔で、血染めの晚餐を用意しようというのだろう。

エドワードがその意味を理解するのに一瞬、間を要する。それから、彼は、恐怖を思わせる、ささやくような口調で言う、「思いついたら、躊躇うということのない奴だ」。

リチャードは兄弟にとつてすら理解を超えている。そして、王立シェイクスピア劇団がこの場面を演じた脈絡では、エドワードの言葉は、今まで劇場で聞いた言葉のうちで、最も強く響くものの一つだった。突然、どこからともなく涙が湧いてきた。何ということか。エドワードとクラランスですら、文字通り飽くことを知らないリチャードの血の渴きに震撼（それが適切な言葉だろうか）しているのだ（三）。

勝利したはずの者たちを捕らえるこの癒やしがたい消耗の感覚の中に、私たちは、王を頂点に戴く社会秩序とそれに依拠した人間関係の崩壊の過程について、シェイクスピアが直感的に感じ取った、最終的な帰結の一つを看取ることが出来るのではないだろうか。彼らはなかなば口ごもるようになって、これでようやく平和が到来して平穏で幸せな統治の日々を享受できると期待の念を表明するが、そのぎこちなくそれでいてあまりに虫のいい見通しは、自分たちの血塗られた過去についての消し難い記憶と、いま手にかけたばかりの先王の死体の傍らで足を引きずりながら跳ね踊るリチャードの癡癡したような笑いとは耳障りな独白という、その両方によつて半ばかき消されている。

俺には兄弟などいないし、兄弟になど似てもいない。

そして、年寄りたちが神聖だと称するこの「愛」という言葉は、互いに似ている奴らの中に住まうもので、

俺の中にはありはしない。俺は自分ただ一人だ。

クラランス、用心しろよ、お前は俺を光から遠ざけているが、俺がお前のために漆黒の日を用意してやるからな。

（五幕六場八〇―八五行）

この劇も、平和な治世を期するエドワードの言葉でひとまず閉じられるが、その主題上の結末は、遠く隔たった二つの極―これ以上な

いほど残酷な否認に晒されながら、この世界の秩序を最後まで信じて亡くなっていったヘンリーのほとんど不可能なまでの心のやすらぎと、その秩序の破壊に最も積極的に加担し、それゆえ、その害を最も深くこうむった勝者たちの癒やしがたい精神の荒廃、という二つの極―に完全に分かれたれている。ヘンリーが精神的に荒廃したこれらの人々ほど害をこうむっていないということはけつしてない。けれども、振り返って見ると、彼の周りにはつねに、身を食むような自己分裂の意識、自分の道徳性に対する鋭い疑念にさらされることのない人間だけに許される、どこか幸福な雰囲気か漂っていた。ヘンリーは自分を取り巻く世界のおぞましさに震撼するが、彼は自身の人間性を根本から疑うことはなかったし、また、疑う必要もなかった。エドワードやクラランスにしても、厳密な意味で自己分裂に苦しむということはないかもしれないが、彼らの精神的な荒廃と消耗の感覚が、他の人々に対する彼ら自身の蛮行と人間関係の崩壊がもたらしたものであるということは明らかだろう。

この獸性と精神の荒廃の最終的な段階を見るためには、次に来る『リチャード三世』を待たねばならないが、シェイクスピアによるこれ以降の史劇と悲劇を貫く根本的な問題は、この三部作の結末における、人のありようの二極化に見て取ることが出来るだろう。これらの作品はみな、この二つの極―秩序があると信じられた世界の上に立って敗れていった王がなおも最後まで保ちえた心のやすらぎと、勝利した王の心を捕らえる、社会秩序の崩壊と内面の人間性の荒廃の感覚―のあいだの距離を測り、何らかの形でその溝を埋めよ

うとする試みであるように思われる。

『リチャード三世』については、他で論じたことがあるので、ここで言葉を重ねるのは控えたいが、行きがかり上、ごく簡単に触れておきたい(四)。シェイクスピアの英国史劇前期四部作の最終作に当たるこの芝居は、一面としては、テューダー王朝の始祖であるヘンリー七世の栄えある勝利を讃えるものでもあるが、本質的には、あくまで「リチャード三世の悲劇」―人間関係の意味を完全に否定し、最後には、絶対的な孤独と自己憎悪という避けがたい地獄に立ち至ってゆく人間の悲劇―である(五)。

怯えて冷たい汗が俺の震える肉体から湧いてくる。

俺は何を恐れているんだ。そばには他に誰もいやしないぞ。

リチャードはリチャードを愛している。つまり、俺は俺なのだ。ここに人殺しでもいるのか。いいや―いや、いる、俺がそうだ。なら、逃げる。何だと、俺自身からか。そうする尤もな理由があるぞ。

俺が復讐しないようにな。俺が俺自身に復讐するとか。

馬鹿な、俺は俺を愛している。俺が俺自身にした
いったいどんな親切で、というんだ。

ああ、違う、俺はむしろ、俺自身が犯した
憎むべき行為の数々で、俺自身を憎んでいるのだ。

(五幕三場一八一―一九〇行)

ランカスター家とヨーク家の合体とテューダー王朝の創設という、扱われている歴史上の出来事の性格もあって、この劇の結末は、表面的にはかなり前向きな印象のものとなっているが、ヘンリー・テューダーの勝利は、リチャードの内的絶望という問題に対して本質的に何の解決も意味していない。このリチャードの内的絶望という解決のないありように、私たちは、『ヘンリー六世・第一部』以降進行してきた社会秩序と人間関係の崩壊過程が行き着いた一つの最終的な様相を看取ることが出来るだろう。

けれどもまた、『リチャード三世』の中には、単にそれだけには終わらない、新たなありよう、人と世界の新たな関わり方が示唆されているのも事実である。そして、そういったありよう、さらには、君主としての新たなあり方は、『リチャード二世』に始まる英国史劇後期四部作と『ジョン王』を通して、さまざまな角度から検討吟味され、深められてゆくことになる。しかし、言うまでもなく、そういった探究は、シェイクスピアが『ヘンリー六世』三部作とさらには『リチャード三世』を通して余すところなく描き出した、伝統的な社会秩序の崩壊とそれがもたらす人々の完全な精神的荒廃という地平があつて初めて、その次に来る新たな課題、新たな可能性として浮かび上がってくるものだろう。それは、それ自体、きわめて困難で曲折に満ちた探究であるが、なおも、そういった探究のための確固たる足がかりを築いたという点で、『ヘンリー六世』三部作は、単なる習作という域を大きく超えて、シェイクスピアのキャリア全

体の方向性を定める重要な作品だったと言えるだろう。

注

第三章

- (一)『ヘンリー六世・第二部』と『同・第三部』のテキスト並びに執筆・共作等に関する問題については、Ronald Knowles (ed.), *King Henry VI, Part 2* ("The Arden Shakespeare," Third Series, 1999), "Introduction," pp. 106-41 並びに John D. Cox and Eric Rasmussen (eds.), *William Shakespeare, King Henry VI: Part 3* ("The Arden Shakespeare," Third Series, 2001), "Introduction, pp. 148-76 を参照されたい。

(二)『第一部』二幕四場の「テンプル教会の庭」における、ヨークとランカスター派のサマセットとの諍いの中で、ソールズベリーとウオリックの親子は白薔薇を受け取って、ヨーク派につくことを鮮明にしており、『第二部』になって、改めて、ヨークが自分の主張の正当性を彼らに説くというのは、見ようによれば、少し余計な繰り返しのようなものであるが、これは、一つには、『第二部』の方が『第一部』より先に書かれたということもあって、ここでヨークが二人に自分の主張を聞かせるというのはそれなりに必要なことと感じられ、その一方で、『第一部』では、薔薇戦争の萌芽として、「テンプル教会の場面」を置くことにも、やはり一定の必然性があつたということなのかもしれない。

- (三) Willard Farnham, *The Medieval Heritage of Elizabethan Tragedy* (Oxford: Basil Blackwell, 1936) を参照された。
- (四) Maek Maynard, Jr., *Killing the King* (New Haven: Yale University Press, 1973), p. 1.
- (五) Emrys Jones, *The Origins of Shakespeare* (Oxford: Oxford University Press, 1977), pp. 172-8. 残念ながら、シヨーンズは、つうじつたエピソードが劇全体にもたらす効果については、ほとんど論じていない。
- (六) Tillyard, *Shakespeare's History Plays*, p. 183 を参照されたい。
- (七) David Bevington, *Tudor Drama and Politics* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1968), p. 239 を参照された。
- (八) Henry Ansgar Kelly, *Devine Providence in the England of Shakespeare's Histories* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1970), pp. 253-61 を参照された。

第四章

- (一) Hugh M. Richmond, *Shakespeare's Political Plays* (Gloucester, Massachusetts; Peter Smith, 1977, org. 1967), pp. 56-74 ↪ Robert Ornstein, *A Kingdom for a Stage* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1972), pp. 52-61 を参照された。
- (二) Jones, 前掲書、186 頁。
- (三) Homer D. Swander, "The Rediscovery of Henry VI," *Shakespeare Quarterly*, vol. XXIX (1978), pp. 160f.
- (四) 高田茂樹「エリザベス朝悲劇における個人の発見」『リチャード

三世のモラルとエートス』(『岡山大学教養部紀要』第一八号(一九八二)一五―七八頁)。ただ、この論文自体は、ずいぶん以前のもので、今から振り返ると、言い尽くしていない点は少なくない。

- (五) S. C. Sen Gupta, *Shakespeare's Historical Plays* (Oxford: Oxford University Press, 1964), pp. 87-97 を参照された。